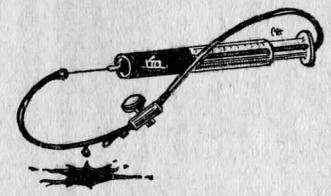


釜ヶ崎医療を考える会

お 雄 珠 島 寺
(作 家)



〈集団の発見〉

健康診断や健康相談。

ピラには当面考えられる問題点、目標が以上の六項目並べられ、

――俺達の生命は俺達で守ろう、というのがメインスローガンだった。

体制の基本と対峙する

釜ヶ崎の医療問題、具体的にいえば日雇労働者の健康を守り、病気や怪我の治療がまともにおこなわれるようにすることは、暴力手配師追放とか、出面(賃金)あげるとかの運動にくらべれば後方的である。暴動に発展し機動隊と追いつ追われつするはなやかさはない。しかし釜ヶ崎のあらゆる問題がそれを追究してゆく社会構造の基本にぶち当たるなかで、医療問題だけが例外であるわけはなく、医療を考える会の活動もまた、現に社会を支配している基本論理との対峙になってくる。

〈ヒ・ガイド〉

連絡先 大阪市西成区東田町44 野島の会事務
所内 電話〇六・六三一・二三八三
(毎週土、日曜正午から午後八時まで
代表者在室)
代表者 林虎三 中村豊秋
機関誌 『いのち』不定期
『ニュース』不定期
その他ピラ、パンフ等発行

越冬対策テント村から

釜ヶ崎医療を考える会の最初のピラは、一九七二年四月一〇日に撒かれた。それは、七一年末―七二年正月の間、釜ヶ崎の四条ヶ辻公園を拠点におこなった越冬対策実行委員会の活動、特に医療班の活動を踏まえて発想されたことだった。

越冬対策実行委は、年末年始の日雇労働者の就労(求人)が激減する時期、例年あらわれる大量のアオカン(野宿)と、アオカンが原因となつてのいわゆる凍死続発を防ぐために、釜ヶ崎で活動している新左翼諸セクトなどが連合して始めたことである。

アオカンの徹底調査がまずおこなわれ、甘酒とにぎりめしの無料配布から、四条ヶ辻公園へテント村を設け貸布団を備えての仮泊設備、炊き出しがその軸になった。甘酒・にぎりめしの配布は一〇〇どまりだったが、テント村はそれを大きく上廻った人数となり、病人も多くふくまれていた。実行委は病人を救急病院へ送りこむばかりでなく、入院後の日用必需品を持って送りこんだ人々を見舞い、医療班はテント村で簡単な健康診断をおこな

もつとも単純にみて、釜ヶ崎の労働者の健康を守ることが、安価な使い棄ての対象としてしか釜ヶ崎の労働者を認識しない資本への根底的な反抗なのだ。

いま、釜ヶ崎の日雇労働者は概数約二万人といわれている。万国博前には概数約一万五〇〇〇人が通り相場だったから増加は明らかだ。

それは大多数の単身者と少数の世帯持ちであり、大多数の建設業就労者と少数の港湾・製造・運輸就労者であり、大多数の青・壮年と少数の老年であり、大多数の酒のみと少数の甘党であり、大多数の民間就労者と少数の職安(失対)就労者であるというように、幾通りにも分類できる労働者群なのだが、どういう分類をも通じての総体的特徴に、職業として、あるいは身すぎのさまとして一代限りだ、ということがある。世帯持ちでもわが子に向つてとうちゃんの後をつげとは決していわない。子供は適当な時期に適当な方法で釜ヶ崎から消えてゆく。まして特定した性の相手をもたない単身労働者は、ごく稀れな「脱釜」の達成者以外、ひとりで死んでゆくだけである。

つた。

そして、漠然とは誰にもわかつていた病院の取扱いのひどさ、労働者の健康がむしばまれている状態が根拠をもつて確認された。これを放置することはできない、ならばと

りあえずどうするか、というのが釜ヶ崎医療を考える会が生れる前段階である。

最初のピラから少し抜き書きしてみよう。

――健康診断をした人の中では、肝臓をやられてる人が多くいた。救急患者は阪和病院と大和中央病院に送られ、その待遇の悪さにおどろかさされた。……医者はほとんど診察にこない。国の援助もある我々の治療費を切りつめて、もうけていくばかりだ。医者よりガードマンの多い病院。少々の酒をのんだくらいで精神病院へ送る西成ケイ寮。へたをすると、ヤミから闇に葬り去られ、無縁仏になつてしまふ。冗談じゃあない……

医療を考える会はどうして発足した。

――病院での差別待遇や治療上の不安。

――健康保険や生活保護のこと。

――酒とアルコール中毒や肝臓病のこと。

――精神病院や警察での扱い。

――医療センターや救急病院のこと。

しかし、にもかかわらず、釜ヶ崎労働者の総体は増加傾向を示しながら常に一定水準を保っている。死者のあとが補充されているわけだ。それが体制の構造であり論理である。

この稿にとりかかる少し前、大阪文学学校のチューターもしているという南九州出身の青年が、自分の田舎の荒廃と政府の農業政策とのからみ合いを語って涙をこぼす場面に出会った。その青年がはげしく嘆いた農民の出稼ぎ、社外工や飯場土工など釜ヶ崎と紙一重の差もあるかなしかの境涯への流出こそが、一代限りでひとり死んでゆく釜ヶ崎労働者の補充コースなので、それはサトウやタナカなどの固有名詞に関係ない、むしろサトウやタナカをも使用人として造出する構造の自動装置のはたらきといふべきだろう。

つまり、釜ヶ崎の日雇労働者群は、あまり丈夫で長持ちしてはならず、病み傷ついたら早く死んでしまわなければ、自動装置に狂いが出てくる。そこにどうして、まともな、人間の医療が存在し得ようか。存在することの方が、こんにちの社会の基本に照らして不合理なのである。ならば社会自体の変革なしにまともな医療はない――。

医療を考える会はこの点の確認があつて発足したのだが、しかし日常的には、労働者個々が直面している病み傷ついた場合の現実の改善がまず課題となつた。

その日常活動の一部

『釜ヶ崎医療ニュース』は七二年メーデーごろに発行が開始され、五月一四日は無料健康診断が三角公園で行なわれている。つづいてガリ版で一六ページ、漫画も入った『健康ノート』が、高血圧・心臓・胃と腸・肝臓・酒について、尿・貧血・結核・夏の食生活など、病気についての常識を広めるために配布、七月発行の『医療ニュース』四号には次の記事がある。

——入院したが小づかい銭がぜんぜんなくて困った時に、救急車で入院した人、行路病扱いの人。自分で福祉事務所に申請したら、ケースワーカーが聞ききて手続きをとってくれる。一ヶ月、五千七百十円出ます。しかし役所だから、のんびりしてたら金が出るのは遅くなる。せかさなアカン／日雇健保で入院した人、休んでる人。入院した日、休業した日から三日後から、一日、二百二十円が「傷

も心臓疾患も)、行路病者として入院後の死などである。

——全国からしぼり出され吹き寄せられて釜ヶ崎へきた労働者は、しかし社会派ぶって万事世の中が悪いせいとはほとんどいわず、わが身の不運と甲斐性のなさを恥じている。そして偽名を使う(偽名という形容に私は賛成しないが便宜上使用)。だから、どういふ死に方をしたにせよスナナリと身元が判明することは少ない。

たとえば次の例は七三年二月のことだ。

就労先へ行く途中で一人の労働者が倒れ、同行していた労働者仲間の世話で近くの救急病院に運ぶことができた。身元は一切不明である(釜ヶ崎では就労するのに氏名年令など必要としないのが通常。一見丈夫そうな体軀であればよい)。この入院した労働者について『医療ニュース』は早速呼びかけをおこなったが、何もわからぬまま労働者は四日後に死んだ。その間、病院で一度も意識を回復しなかったという。死因は脳卒中だった。

いくらでもあるうちの、たまたまの一例にすぎない、ともいえるこの事実から、医療を考える会はパンフを作つて訴えた。

病手当金」として出ます。申請書が労働福祉センターにあるので、医者に書いてもらったから、センターが手続きをしてくれます……記事を書きうつしたのは、たとえば「せかさなアカン」の個所に見られるような、労働者に密着して行こうとする態度の、ともすればハネアガリと激発にのみ陥りがちな釜ヶ崎の諸セクトらしくなさを知ってもらいたい私の気持からで、それはこんなふうにも現れている。

——洗面用具もないときは、洗面用具は労働福祉センターで用意しているそうです。釜ヶ崎医療を考える会でも用意しています。必要な人は電話して下さい。(番号記載)……さらに『医療ニュース』五号は夏バテ防止の食べ物解説したあと日射病の予防と手当を説いた結びに次の三行を当てている。

——仕事にいった時は、現場で無理して働くのはよくありません。適当にさぼり、適当に日陰で休けいをとることが大切です……(傍点も原文通り)

これは去年の夏のことだが、今年の大阪の、カラ梅雨の炎天つづきには一層びつたりした文句である。

——(死んだ労働者の)腹まきにしまわれない、たくさんのおまもり札が、抑圧され苦しめられてきた生前を物語っているようだった。この死んでいった仲間にとって、社会は、たえがたく苦しく、このおまもりだけが、はだ身はなさず持っていたおまもりだけが、ささやかな心よりどころだったに違いない。四〇歳ぐらいで死んでいくなんて、あまりにも若いではないか。それもほとんどが、体をポロポロにされて死んでいくのだ。

釜の労働者は、四〇代あるいは五〇代で、ほとんど倒れていく。(中略)二六日の朝、センターの噴水前で、このおまもりだけを残して死んでいった労働者を、釜ヶ崎無名信士として、ささやかではあるが、釜の働く仲間の手で、人民葬を行なった。線香をたて、菊の花を数本おいた質素なものではあった。しかし、多くの仲間が弔ってくれた……

批判すれば、文章は感傷美文調であり、仏教形式に順応しすぎているが、こういう労働者の死を殺されたものと捉えて、

——仲間をこれ以上殺させないために、死の淵から団結しよう、仲間の復しゅうを果たそう……

こうして医療を考える会が釜ヶ崎労働者の間に存在を知られ、頼りにされはじめ、活動の強化と整備のために七二年八月には会の『内部通信』0号も出した。正式に創刊号を名乗った『内部通信』では第一五回病院精神医学会総会(京都)も記事になっており、活動が釜ヶ崎の地域内に限定されず、広い接触交流をもちはじめたことがわかる。また、暴動に負傷という側面から止血法や骨折の副木の当て方を図解した『救済医療研究会報』も出ている。だが、多面的な活動を時間経過に従って述べる余裕はないので、七三年夏という現在、会が主要な課題としている点を見てゆきたい。その第一は、行路病死者(無縁仏)の徹底的な調査研究、第二は精神病院の問題である。

無縁仏と解剖と

前に私は、釜ヶ崎労働者の大多数を占める単身者はひとりて死んでゆく、と書いた。それを少し分けてみれば、作業現場の労働災害死、自殺、犯罪(殺人、傷害致死など)の被害者としての死、いわゆる凍死、それ以外のさまざまな路上死(交通事故も急性アルコール中毒

と呼びかけているのは、医療を考える会の基本を示して決然としている。

すでに消滅した半官製的な釜ヶ崎の文学サークル『裸』の会の機関誌に、次の俳句があったことを私は思い出す。

盆供養他人ばかりの合掌よ

俳名を仲間砂風郎といったこの句の作者も故人となったそうだが、パンフが述べているような「人民葬」あるいは労働者葬を仲間うちで行なうことと、身元を調査して肉親に骨を渡すことのとどちらが妥当なのか、そのあたり、まだ私にはパンフの筆者の考え方がよくのみこめない。無縁仏として大阪市立北斎場に葬られるのが、労働者にとって真に不当であるかどうかということもある。ただ私もよくわかつて賛成なのは、

——すでに生きている間、下積みの生活者としてまさに膏血を絞られて、医療もろくに受けずに死んだ者が、死体までを学問に「貢献」させられることはないのである。ぬくぬくと生き、手厚く診療されて死んだ者こそ解剖すればいいのだ……と『釜ヶ崎語彙集』に述べたパンフの筆者の共働者の考えで、これはまったくその通りだと思つている。(大阪市の

行監死亡事務取扱要項は身元不明死体の学術解剖を禁じている。しかし別に死体解剖法というのがある。その第八條の死因不明の場合の監察医の検案および解剖が、医学部教授の監察医兼任というところで、学術的であり得る道をはらいてゐる。

なぐり殺した精神病院

精神病院の問題は（もまた）一つではないが、ここでは丁度一ヶ月前の七月八日、警察調べで一二五人もの者が電車約三分、降りてから徒歩五・五キロという道程を抗議デモに行つた阪奈サナトリウム（旧名栗岡病院）に限つてしまふ。

医療を考える会が不定期に発行している雑誌『いのち』三号に、悪徳病院糾弾集会でおこなわれた阪奈サナトリウムの患者だった人の報告がある。引用する。

患者を患者と思わぬ、金の卵を生むニワトリとせんが為に病院がやつとることに患者がぐやしがって、脱走計画をしたんです。十七名の患者が、アル中患者が主体となつてそれが不成功に終つたが為に、みんな翌朝一人、二人と呼び出されて（中略）素裸にされて、で、木刀、最後には木刀も折れてしまつ

て、野球バットでどついて、そして一人が犠牲者となつて死にました。それが釜ヶ崎からでた男です。盛ときひろ。ええ、鹿児島県大島郡（奄美大島）の男です。釜ヶ崎から行つた男です。

「聴衆の労働者」ほんとの話か。

——ほんと。わしや、こつから先、うそ言わん（中略）、その事実を訴える手紙を報告者は院内で書き、病院の隣の宅地造成現場へ投げた。それが検察庁へ届いて、約二ヶ月か三ヶ月して、ええ、翌年の十月十日か十一日でした。で、検察庁、バツと来たわけなんです。そして全部、殴つた奴を、殺した奴を引っぱつていきました……

事件が起つたのは六八年一二月で、逮捕された院長栗岡良幸らの傷害致死事件公判はまだ終つていない。そして、事件発覚で悪名をさらした栗岡病院が阪奈サナトリウムと変更されたのは、病院の医療内容が改善されたことではなく、殺された盛さん以外の事件関係者一六人のうち五人が現在までに院内で死亡している。民間刑務所とさえ呼ばれる閉鎖的な精神病院のなかで、すべて四〇代以下の人々が五人も死んだことを、或る種の報復がお

こなわれたかと疑うのは決して無理ではないだろう。

医療を考える会と協力関係にある「栗岡病院を糾弾し解体する会」のビラは次のように訴えている。

——栗岡病院では、事件後この事件を外にもらさぬために人種の抑圧はますます進行し、面会通信の自由はまったくなく、それを破れば院長自らの暴力・保護室・電気ショックなどによる制裁という、おそるべき事態がつづいているのです……

事件を告発した人は松末三郎氏といい、手記『神の隣に医師の席はない』が医療を考える会からガリ版で発行されている。

精神病院の問題が釜ヶ崎で重要なのは、ほとんどの労働者と不可分に結びついた酒の問題でもあるわけで、労働者はわかりきった自己偽瞞としてのむ酒に溺没しやすい。その果てが、いとも簡単にアルコール中毒患者としての精神病院送りである。

少し古い朝日新聞から数字をとると、七〇年度に釜ヶ崎で泥酔保護された者二六五三人、このうちアルコール中毒患者として強制措置入院させられた者一七五人、ほかに通報

によつて強制措置入院させられた者一九七人、計四七二人となる。これらの「患者」は、普通のアル中患者の在院が一―三ヶ月から半年程度なのに比較してはるかに長く入院させられるのが例で、七年、一〇年も置かれた人もいる。そして在院中は作業療法を名目とした強制労働があり、寒中に胸までのゴム長靴で川の砂利とりをさせられた報告もある。

くそビニールタンな人々のような、労働者と酒の縁切りという愚劣なこととは説かない医療を考える会だけに、アルコール中毒ばかりでなく肝臓疾患も多い釜ヶ崎の酒問題にどう対処してゆくか。この一つだけでも大きく深刻なテーマであるとだけいっておこう。

「死」という詩

いま、医療を考える会が内部に医療従事者（医師・看護婦）をかかえていない。当初には医療従事者がいたので健康診断もできたわけで、その点のみをいえば活動の一環の崩れにちがいない。しかし私が見たところでは、どつちみち実際にはチャチな形ではかできない医療の実践活動をするよりは、患者あるいは潜在的な患者の立場一本で、できる限りの医

療改善、労働者に対するまともな医療を要求し、獲得してゆく方が日常活動としては有効で得策なようである。

それは、私がこのレポートでは故意に圏外に置いた大阪社会医療センター（所長本田良寛、釜ヶ崎唯一の総合病院）との関係という面でもおそらく同じだろう。

全共闘はなやかなりし頃、岡山大医闘委の二人の学生が釜ヶ崎の私を訪ねてきて、いずれこの地域でまともな医療活動をと熟っぽく話して行つたことがあった。その二人の一人はいま東京で公立病院の勤務医になりあとの一人は知らないが、この医療を考える会の存在を彼らが読んでなんらかの反応を示すかどうか。

医療を考える会と同じ戦線に立っている雑誌『釜ヶ崎』二号から詩を一篇紹介する。

死

クリスマススイブ
粉雪が舞っていた
ガード下で やせた男がひとりたおれてた
ヘッドライトが
つぎつぎに 照らしては消えた

抱きおこしてみた
酒のおいはなかった
死んでいた
かすかに 笑つてるように見えた

それからおれは そばの酒やでのおんだ
立ったままのおんだ
チビチビのおんだ
一合だけのおんだ
それから友だちのところまで一時間程しゃべつて
しょんべんして 寝た

（石川ヒデオ）

立ち戻つていえば、こういう死を労働者がしないために、しぼり出し吹き寄せ使い殺す今日の支配構造に逆らつて「冗談じゃない」と居直るために、釜ヶ崎医療を考える会が生まれ、いま存在し、いよいよ歴然と存在しつづけねばならぬということだ。（特記しなかつたものも発行物はすべてガリ版である）



東洋インキ
製造株式会社